

[B年] 聖霊降臨節第8主日(2022年7月24日)**【旧約聖書日課】列王記上 10章1～13節**

1シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。2彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、3ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は一つなかった。

4シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、5また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

6女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。7わたしは、ここに来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。8あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。9あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

10彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

11また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。12王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための豎琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、

今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

13ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。

【使徒書日課】**テモテへの手紙一 3章14～16節**

14わたしは、間もなくあなたのところへ行きたいと思いながら、この手紙を書いています。15行くのが遅れる場合、神の家でどのように生活すべきかを知ってもらいたいです。神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。16信心の秘められた真理は確かに偉大です。すなわち、

キリストは肉において現れ、
“霊”において義とされ、
天使たちに見られ、
異邦人の間で宣べ伝えられ、
世界中で信じられ、
栄光のうちに上げられた。

【福音書日課】**マルコによる福音書 8章22～26節**

22一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。23イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。24すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」25そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。26イエスは、「この村に入っただけならいい」と言って、その人を家に帰された。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 10章1～13節

1シェバの女王は、主の名によるソロモンの名
 声を聞き、難問をもって彼を試そうとやって来
 た。2女王は非常に多くの従者を連れ、香料や大
 量の金と宝石をらくだに積んで、エルサレムへ
 やって来た。ソロモンのもとに来ると、彼女は
 心にあった疑問を王に尋ねた。3ソロモンは問い
 かけのすべてに答えた。王に分からないこと、
 答えられないことは何一つなかった。4シェバの
 女王は、ソロモンの深い知恵と、彼が建てた宮
 殿に目を見張った。5また食卓の料理、家臣の居
 住まい、給仕の振る舞いとその服装、献酌官、
 それに王が主の神殿で献げる焼き尽くすいけに
 えを見て、息も止まるほどであった。

6女王は王に言った。「あなたの事績とあなた
 の知恵について、私が国で聞いていたことは本
 当でした。7私は、ここに来て、この目で実際に
 見るまでは、そうしたことを信じてはいません
 でした。しかし、私にはその半分も知らされて
 いなかったのです。あなたの知恵と富は、私が
 噂に聞いていたことをはるかに超えています。8
 あなたの国民はなんと幸せなことでしょう。い
 つもあなたの御前に仕え、その知恵を耳にして
 いる家臣はなんと幸せなことでしょう。9あなた
 をイスラエルの王座に着けることをお望みにな
 った、あなたの神、主はたたえられますように。
 主は、イスラエルをとこしえに愛しておられる
 ので、公正と正義を行うために、あなたを王と
 されたのです。」10彼女は金百二十キカルと非常
 に多くの香料、宝石を王に贈った。シェバの女
 王がソロモン王に贈ったような多くの香料が入
 って来ることは、二度となかった。

11また、オフィルから金を積んで来たヒラム
 の船団は、オフィルから非常に多くの白檀や宝
 石も運んで来た。12王はこの白檀の木材で、主の
 神殿や王宮の欄干、詠唱者たちのための琴や豎
 琴を作った。このように白檀の木材が入って来
 ることはかつてなかったし、今日に至るまで、
 そのようなことは見られなかった。

13ソロモン王は、自らシェバの女王に贈った
 物のほかに、彼女が願うものは何でも望みのま
 まに与えた。こうして、女王とその供の者は故
 国へ帰って行った。

テモテへの手紙一 3章14～16節

14私は、すぐにあなたのところへ行きたいと
 思いながら、この手紙を書いています。15私が遅
 れた場合に、神の家でどう振る舞うべきかを知
 ってもらうためです。神の家とは、真理の柱で
 あり土台である生ける神の教会です。16まぎれ
 もなく偉大なのは、敬虔の秘義です。すなわち、
 キリストは肉において現れ
 霊において義とされ、
 天使たちに見られ、
 異邦人の間で宣べ伝えられ、
 諸民族の中で信じられ、
 栄光のうちに上げられた。

マルコによる福音書 8章22～26節

22一行はベトサイダに着いた。人々が一人の
 盲人をイエスのところに連れて来て、触れてい
 ただきたいと願った。23イエスは盲人の手を取
 って、村の外に連れ出し、その両目に唾をつけ、
 両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」
 とお尋ねになった。24すると、盲人は見えるよ
 うになって、言った。「人が見えます。木のよう
 ですが、歩いているのが分かります。」25そこで、
 イエスがもう一度両手をその目に当てられると、
 見つめているうちに、すっかり治り、何でもは
 っきり見えるようになった。26イエスは、「村に
 入ってはいけない」と言って、その人を家に帰
 された。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・7月24日「聖霊降臨節第8主日」の日課主題は「神からの真理」。古代オリエント世界では、宗教界を背景に広範な繋がりを持つ「知恵」の文化が形成され、経験則に基づく実用的な知識の蓄積と継承が「知恵者(賢者)」によって担われていたことが知られている。その結実としての文献史料は、「知恵文学」として知られ、『聖書』中でも「ヨブ記」「箴言」「コヘレトの言葉」などがこれに該当するものとして扱われている。『聖書』中の知恵文学の特徴は、その知恵を生かす前提として「主を畏れること」(箴言 1:7、コヘレト 11:13)が示されることにある。

・旧約聖書日課は、「列王記上」から、ソロモン王の統治の全盛期を伝える伝承集の内、「知恵者」としての評判を伝える逸話の箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙一」から、「神の真理」の具現として位置づけられる「神の教会」を語る箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスがベトサイダで盲人を癒された箇所。

旧約日課(列王記上 10 章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典「前の預言者」の第4に置かれた「王国正史物語」で、ユダ・イスラエル王国の完成者としてのダビデ王の死から始まり、ソロモン王の死後に分裂した両王国が、イスラエル王国(北王国)はアッシリアによって、ユダ王国(南王国)はバビロニアによって滅ぼされるまでを扱っている。上下二巻に分けられているのは、便宜上のこと。

・日課箇所は、ダビデ王の晩年、王位継承争いに勝ち残ったソロモンが王に即位し、統治体制を整え、王宮および神殿の建設を完成させた後の評判を、国賓として迎えたシェバの女王の逸話として描いている。ここには二つの要素が組み入れられており、第一にソロモン王の知恵者としての評判、第二にソロモンの王国の経済的豊かさについての評判が、両者不可分のものとして描かれている。

・ソロモンは、『聖書』正典中で「知恵者」として扱われる代表的人物である。オリエント世界の「知恵」の伝統は、一般に宗教者(祭司・神官集団)によって担われていたとされる。一方で、世俗権力者としての王は、「知恵」よりも「武勳」によって評価されるのが一般的である。ソロモンの父ダビデ王も、ダビデの先駆的存在であるサウル王も、武勳によって知られたことが伝えられている。一方で、正典の伝えるダビデ・ソロモンのユダ・イスラエル王国は、王立神殿の建立など、王が事実上の宗教主宰者となる祭政一致の国家観で描かれている。殊にソロモン王は、少なくとも正典中に伝えられる武勳がほとんどない王であり、宗教主宰者としての側面に評価が傾いていると見ることもできる。実際には、内政において強権的な手法を取っていたと考えられ、それが没後の王国分裂の遠因となった。

・「シェバの女王」の王国「シェバ(シバ)」は、古代伝承から、南アラビアまたはエチオピアに実在した王国と考えられているが、特定されていない。一方、「ヒラムの船団」とは、ティルス王「ヒラム」の支配下にある商船団を指すことは間違いない。ダビデ・ソロモンのユダ・イスラエル王国は、北方の海洋民族フェニキア系諸都市国家(ティルスなど)との結びつきの強さが知られているが、南方の諸国との関係はあまり知られていない。南方の(と推測される)王国「シェバ」との結びつきが、このソロモン王の時代に始まったことを示唆する逸話として伝承されてきたのだろう。

使徒書日課(Ⅰテモテ 3 章より)

・「テモテへの手紙一」は、使徒パウロが伝道協力者のテモテに宛てて伝道者としての助言を書き送ったとされる書簡。「パウロ書簡集」中、「手紙二」および「テトスへの手紙」と共に「牧会書簡」と呼ばれるが、現代の聖書学者の中にはこれらの書簡をパウロの真筆とみなさない者もある。本書簡が冒頭で述べていることを素直に受けとめるならば、パウロがアジア州・エフェソを拠点とした二年ほどの活動を終結させてエルサレムに向かう前、マケドニア州やアカイア州の諸教会を巡っていた時期(使徒 19 章)、あるいはすでにエルサレムに向かっていた時期に(同 20 章)、エフェソに留まっているテモテに宛てて記した書簡、ということになる。パウロのエフェソでの活動は、一定の成果を上げたと考えられるが、政敵と対立し、同地での活動を断念しなければならなくなるような状況も生じていたと考えられる(パウロが向かったエルサレムには、アジア州からのユダヤ人が追って来て騒動を惹き起こしたとされている。使徒 21:27)。エフェソに残したテモテは、パウロの名代的な立場で、同地の教会共同体を指導することになっていたのだろう。教会伝承では、テモテはエフェソ教会共同体の主教(司教)として15年間指導したとされている。なお、使徒ヨハネも、エフェソ教会共同体を指導した人物として教会伝承が伝えている。エフェソにおけるパウロおよびテモテと使徒ヨハネとの関係を知る手掛かりは、新約文書には見られない。

・日課箇所は、パウロ自身がテモテを訪ねる希望を持ちながら過ごす中で本書簡を記していることを明らかにしながら、「神の家」としての「神の教会」での生活規範を伝えようという執筆意図が語られている。

・「神の家(オイコス・テウ)」は、ここでは「神の教会」のことであると説明されているが、『聖書』全般では多義的に用いられている。もっとも素朴には、「創世記」の伝える族長ヤコブの「梯子」の伝承で示される「ベテル」の地名譚が知られる。しかし、より広く用いられるのは、「神殿」または「神の民」としてのイスラエルを指した用法で、旧約でも新約でも見られる。「パウロ書簡」中では、この用例以外に見られず、「神の家族(オイケイオス・テウ)」という類似表現がエフェソ書に1例あるのみである。

・パウロが「教会」を「家」にたとえる表現として、「家(オイコス)」の派生語「造り上げる(オイコドメオ)」を多用していることは、注目に値する(Ⅰコリ 14 章参照)。

福音書日課(マルコ 8 章より)

・日課箇所は、前週福音書日課に続く箇所、文脈的には、前段で湖を舟に渡っている最中の逸話が語られていたのを受けて、日課箇所では到着地ベトサイダが場面として設定されている。「ベトサイダ」は、「漁師の家」の意の地名で、カファルナウムの東、ガリラヤ湖に注ぎ込む河口近くに位置する町とされる。「ヨハネによる福音書」によると、主イエスの弟子たちのうち、ペトロとアンデレおよびフィリポがこの町の出身者である(ヨハネ 1:44)。しかし、共観福音書によれば、ペトロの家はカファルナウムにあったことが知られる。古代文献によると、「ベトサイダ」は、別名「ベトサイダ・ユリアス」と呼ばれ、ヘロデ大王の後継者の一人ヘロデ・フィリッポスが皇帝アウグストゥスの娘ユリアに因んで名付けたと伝えられるように、当時、ローマ風の都市として再開発されていた。おそらく、同地がユダヤ人の居住地でありながらギリシア・ローマ化が進む土地として知られていたことを暗黙の了解として、日課箇所の逸話を描いているのだろう。マルコ福音書では、6:45 でもベトサイダの地名が現れている。

・共観福音書が共通して伝える「盲人の癒し」の逸話は、「エリコ」を舞台にしたもので、主イエス一行がエルサレムに入られる直前の出来事として伝えられている(マルコ 10:46 以下)。日課箇所の「盲人の癒し」の逸話は、「マルコ」だけが伝えるものである。この逸話の結末には、癒された盲人がこの「村」から離れるようにとの命令にあり、上述の「ベトサイダ」の状況を踏まえると、単なる奇跡ではなく、象徴的な意味が示唆されていると考えられる。つまり、ローマ的文化・価値観によって「見えなくなっていたもの」として「人」が見えるようにされた、という点に、この箇所の使信があると解釈される。

来週の誕生日 (7月24日～30日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-3 番「扉を開きて」(=Ⅰ61「かがやくみとのよ」)は、17-18 世紀ドイツのカトリックと対立の激しい地方で牧師となった多作の讃美歌作家シュモルクの作詞。曲は、17 世紀ドイツの改革派の牧師ネアンダー(本名はノイマン)が詩編歌用に作曲。ネアンダーが住んだデュッセルドルフ近郊の谷は、彼にちなんで「ネアンデル谷」と呼ばれるようになったが、そこで発見されたヒトの化石が「ネアンデルタール人」。

・21-171 番「かみさまのあいは」(=□40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結

果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。

・21-476 番「あめなるよろこび」(=Ⅱ150 番)は C.ウエスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番 = Ⅰ352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

21-3「扉を開きて」

Tut mir auf die schöne Pforte

- 1) Tut mir auf die schöne Pforte, / führt in Gottes Haus mich ein; / ach wie wird an diesem Orte / meine Seele fröhlich sein! / Hier ist Gottes Angesicht, / hier ist lauter Trost und Licht.
- 2) Ich bin, Herr, zu dir gekommen, / komme du nun auch zu mir. / Wo du Wohnung hast genommen, / da ist lauter Himmel hier. / Zieh in meinem Herzen ein, / laß es deinen Tempel sein.
- 3) Laß in Furcht mich vor dich treten, / heilige du Leib und Geist, / daß mein Singen und mein Beten / ein gefälliger Opfer heißt. / Heilige du Mund und Ohr, / zieh das Herze ganz empor.
- 4) Mache mich zum guten Lande, / wenn dein Samkorn auf mich fällt. / Gib mir Licht in dem Verstande / und, was mir wird vorgestellt, / präge du im Herzen ein, / laß es mir zur Frucht gedeihn.
- 5) Stärk in mir den schwachen Glauben, / laß dein teures Kleinod mir / nimmer aus dem Herzen rauben, / halte mir dein Wort stets für, / daß es mir zum Leitstern dient / und zum Trost im Herzen grünt.
- 6) Rede, Herr, so will ich hören, / und dein Wille werd erfüllt; / nichts laß meine Andacht stören, / wenn der Brunn des Lebens quillt; / speise mich mit Himmelsbrot, / tröste mich in aller Not.

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.